

＜田中哲さん講演会とおしゃべり会＞

コロナ禍での子どもの育ち ～いま私たちにできること～

1月29日（土）田中哲さん
（児童精神科医・子どもと家族
のメンタルクリニックやまね
こ院長）を講師に、講演会とお
しゃべり会を行いました。
秋に続き2度目のオンライン
講演会となりました。期間限
定のアーカイブ配信も含め多
くの方に参加、視聴していただ
きました。（当日参加 講演会
99名 おしゃべり
会37名）
「コロナがあんな
状況になっっているこ
とで、自分で発信を
しないといけないと
思わせられている」
と、心境を語られ講
演は始まりました。
そして、コロナ禍で



子どもたちは、3つの不安を解消しようと
して「幼児化」していると。子どもたちの生
活は、直接交流を基盤としたコミュニティー
によって大きく支えられているとして、子ど
もの育ちの支えと心の問題を図によって示さ
れました。今の状況を希望的に考えるために
「昭和20年に何歳だったかが戦争の影響を
考える上で大事なものと同じように、コロナ元
年に何歳だったかの影響は大きい。この時代
の中でソーシャルコミュニケーションを学ぶ
方法を考え、学校と家庭にリ
スクが集中することを避ける
ための居場所の多様化が必要
です。」「歴史の当事者として
どういう振舞いをしたのかは
歴史に残る。そんな歴史の転
換点にいることを子ども達と
感じていくと希望的に考えら
れる、そして不寛容にならな
いことが大切です。最後に、

子どもたちを枠づけするのではなく、子ども
のビーイング（自尊心）を良い状態に維持す
ることと、その子の「らしさ」を支援するウ
エル・ビーイングについて話をされました。
後半のおしゃべり会では、7つのグルー
プに分かれて感想など出しあった後、田中さん
を交え質疑応答の時間を持ちました。一人ひ
とりの質問に共感しながら答えてくださいま
した。
企画にあたり、運営委員会では田中哲さん
の著書「『育つ』こと『育てる』こと 子ど
もの心の寄りそって」を輪読。
「自立の本質とは『自分である
ことを引き受けられる』ことで
す。」など、いくつもの言葉に
考えを深めました。
実行委員長は、中部教育を考
える会代表の檜和田美樹さん
が務めました。

分身ロボット「OriHime(オリヒメ)」開発者

吉藤オリイさん

開催決定！オンライン講演会

2022年9月19日（月）・祝13時～

ふくおか教育を考える会協議会

ニュース

No. 162

2022年3月30日

440部発行

電話

協議会 406-4125

東 部 608-0960

西 部 090-8228-3074

南 部 542-3578

中 部 522-4545

ちくし 080-1728-7178

宗 粕 0940-34-3087

〒815-0037

福岡市南区玉川町

12-22-505

✉ f-kyoiku@helen.

ocn.ne.jp

http://fkyoikuco.

wix.com/fkyoiku

「コロナ禍での子どものそだち」 いま私たちにできること

子どもと家族のメンタルクリニック

やまねこ 院長 田中 哲さん

1、コロナ不安の正体

いつも考えていることがありまして、コロナがあんな状況になっているということで、余計何とか自分で発信をしないといけないということをおぼわされれています。子どもの成長を守るために私たちにできることを考えていきたいと思っています。

■安定した日常が見えない不安

コロナが始まって概して子どもたちは、意外と元気だったのです。ただそれが1カ月、2カ月と過ぎてくると、だんだん子どもたちの様子が変わってくることに気がつきました。

毎朝お母さんが起こしてくれてご飯があつて学校に行けてという形で、毎日暮らしているというこの確かさがある。いつも自分のことを大事にしてくれる友達とか、家族だとかが居るってことを、その日常の生活の中で確認していたのです。けれどもそれが急に見えなくなったのです。そのことのお不安があつたのだら

うと思います。

■戦う相手が見えないことのお不安

もう一つは、一昨年の3〜5月つて、すごくみんな過剰に敏感になつて手洗い・うがいはもちろんですが、マスクなどそれまではなかったいろんな感染対策を一緒にやらされていったところ、その相手は一向に見えない。ウィルスですから見えないのは当たり前です。コロナにかかつている人も見えない。今もそうですけども誰がコロナにかかつてたのかわかんない、何を相手に戦つているのかわかんない、そういう不安があつたように思います。

■いつ終わるのかわからない不安

もう一つは、いつ終わるかわからない。1年半以上経つた今でも全く終わつていない。そういうよくわからない状態になると、子どもにとつては災害みたいなものです。普通はそういう時、大人が当てるのです。でも大人もコロナが怖いし何をしていいかわからない。いつもなら当てる大人がさっぱり当てにならない状況があつた。こういう中で、不安が高まるということが多く起きていました。

■不安を解消しようとしての幼児化

お子さんで、それまでやらなかったようなこ

とをやり出す、いつもと違う、少し様子が違つていうことに気がつかれた方いらつしやいますか？

少しだけ子どもたち全体が赤ちゃん返りしたのです。普通にできていたことができなくなる、お母さんに少しベタベタする、ちいさい子どもと喧嘩するなど。つまり幼児化が起ころのです。子どもにとつて、日常が確かめられなくなった時に何を当てるのかというとう自分が一番頼りにしている大人との関係に戻ろうとしていたのではないか。そうすると大人の目にはちよつと幼児化したように見える。

子どもたちが、成長をしていくベースつていう環境そのものが変わった。変わったことで成長の様子が少し変わつてきてしまつていてということがあります。

コロナのお不安つていうのは子どもにとつて急性期の症状で、それが少し長期化した時の問題として考えてみたいと思います。

2、子どもたちとコロナ禍の下での学校生活

コロナ禍の学校の環境にどんな変化があつたかということです。3ヶ月に及ぶ学校閉鎖があつたのです。

■さまざまな行動制限

学校が開いた後、子どもたちがとても、楽しみだった学習、行事、校外学習、運動会、発表会、部活に制限がかかってほとんどでなくなつた。子どもたちにとつて学校という一緒にいるんなものを作り上げて楽しいという要素が、それだけ大きく減つたのです。

家に籠る、ネット漬けになる子どもたちが多く出てきましたし、運動不足が軒並み子どもたちの大きな問題になっていました。

閉鎖が解けて病院に子どもたちがやってきたときに、担当の先生だけでなく、例えば保健の先生なんか気がついたことは「運動能力が落ちた」、あるいは「体重が増えた」ということでした。保健室にはそれまで、「こんなことで怪我しないのに」みたいなことでやってくる子どもがすごく増えたのです。

■ワクチン、感染による気遣い、差別

ワクチン接種が始まって、社会的な気遣いが広がりました。「あの人はワクチン打った」「僕も打った」みたいなことをあまり胸張つて言えるような状況じゃなかった。ちよつと申し訳ないような感じ。近くで感染が起きた、知っている人がコロナになったみたいなのがあると、

どういうふうに言っているのか神経質になります。だから、他の感染症と大きく違って、感染したことがなかなか自分のこととして語れない状況でした。

一部では感染をしたという事にちよつと差別的なことを言われ、あるいは医療関係者の子どもが、「お前のお母さん、看護師さんでコロナのところで働いているのだから」ということがある。子どもたちがいじめまでいかなくてもちよつと差別的な視線で見られる元になつていた。

■ICTの急速な導入

ICTとGIGAスクール構想の3年4年かけて進むはずだったタブレットの普及つていうのが、すごい勢いで、一斉に整備されて子どもたちに配布されたということがありました。公教育の環境を大きく変えてしまったということがあります。タブレット持つだけなら、いろんな形で子どもたちは電子機器にはすっかりおなじみで、むしろ子どもたちの方がICTに慣れるのは早かったのです。大人の方はちよつと遅れていた。だから今でも先生たちの方にはるかに使い慣れていないみたいな状況があります。

そうすると教師・生徒関係も質的に変わりまじ、子どもが学ぶつていう形そのものが変わりました。その変化そのものはICTという形で国が画策していたことではあるのですけれども、準備がないままに、性急に進められた。もちろんそのことで、ICTを使える家、あまり使えない家の格差が大きくなっていくということが見えました。

■信頼できる情報の不足

コロナ感染症に関する信頼できる情報というのが不足しています。どんどん新しい株が出る。それつてどういうことだ？ワクチンは効くのだろうか？子どもにはどのくらい心配だろうか？新しい株つて、何を心配しなきゃいけないの？とか、ちゃんと信頼できる情報が子ども達のところに届いてなくて、言われるままに対策をしても、自分の目で「コロナつて何だろう？」つていうことを見たり、考えたり、知つたりする機会がすごく制限されていました。

■安全に凝集できない子ども集団

子どもたちは、集まつてワイワイやつて、いろんな知識を共有し合つて、冒険をし合つて、賢くなつて大きくなっていく。子ども集団から初めて生まれる自尊心。子どもたちが子どもと

して輝いている、そういう状況が生まれるので
す。

コロナは、こういったことの全てに、制約を
していったのです。

このことは、もともと少しハンディを背負い、
配慮を必要とする子どもたちが、集団化するこ
とがどんどん難しくなっていました。学校封
鎖後もう一度学校が始まってみると、学校とい
うところは以前にも増してすごく閉鎖されて
窮屈で楽しみが少なくて、子どもたちにとって
は魅力が少なくなっているといったことがあ
るようになります。ここはもともと工
夫しなきゃいけない部分です。

3、子どもたちの育ちの環境はどう変化したか

■直接の対面接触を回避する対人交流

まず直接の対面接触を回避するセルフ・ライ
フスタイルが大きくなっていったということ
です。他人との距離感を少し多めにとって個
人化するっていうライフスタイルそのものは、別
にコロナで始まったことじゃないのです。ライ
フスタイルが近代化していく。そうすると個々
人の個人的な生活様式を大事にしようとする。
それはたとえばプライバシーの重視だとか個

人情報の保護だとかっていう、以前はあまりし
なかったことに配慮をするようになってくる。

例えば学校の教育の中では、担任の先生が家庭
訪問で家が上がったりしないとか、PTAがつ
まらないとか、電話番号も共有しないとか、コ
ロナの前から少しずつ進んできていたわけで
す。お隣同士でも基本的にお互いの生活のこと
はあまりオープンにしない、共有しないです。
例えば町内会の共通の仕事に参加する人が減
っていく。そういう中、協同性からみんなが集
まってワイワイやることに人が集まりにくく
なっていく。これは、たとえば宗教だとか、何
かの勉強会みたいなのも同様です。人がまと
まって動くことをしなくなっていくと、直接の交
流を基盤にしたコミュニティー機能が低下し
ていきます。

子どもたちの生活は、この直接交流を基盤と
したコミュニティーによってすごく大きく支
えられています。子どもは、ある家庭でだけじ
やなくて、地域が子どもを育てていくという側
面がすごく大きい。地域が知り合いと、「ち
よつと家でご飯を食べていく？今日はお母さ
んも遅いのだったら」「ほら、〇〇くん、そん
なところで遊んでいちゃだめよ」という事が起
きます。今はよその家の子どもを自分の家の子

どもと同じように叱るようなことも、だんだん
しなくなっています。本来、そういう中で子ど
もが体験して、社会化していくことを覚えてい
っていた。時代とともに、地域の教育力で子ど
もと一緒に育てていくということが、少なく
なっていくってだけでも、そのことをコロナがガ
ンって後押しした感じです。

地域教育が育ててくれるものは子どもの社
会性です。子どもたちがどうやって社会で生き
ていくか、物事を取引するとか、人と友達にな
るとか、見ず知らずの人はどういう振る舞い
をするかというのは、社会の中で覚え、地域の中
で体験していくはずだったので。地域が関わ
るうにも関わられなくなり、子どもにとっては
チャンスがなくなっていました。

■家庭固有の問題が増幅

家庭の問題でいえば、家族は感染に関しては
運命共同体です。それを引き受けているから、
初めて家族っていうのは成り立つ。それが家族
の基盤です。

例えばお父さんがリモートですと家にい
る。子どもは遊びに行けないから家にいる。そ
うするといつもだったなら気にならないことが、
気になる。いつもお父さんがいるみたいなこと

になってしまふ。やりにくいです。ほどほどの距離。子どもたちは学校や学童に行き、友達と遊びに行く、父さんは仕事に行くことでバランスが取れていた。情緒的な環境が維持しにくくなっていく。家庭は過密なのです。

感染に対する判断が家庭によって格差が生じる。家庭によって全然考え方が違うのです。しかもその家庭同士のやりとりっていうのは、すごく制限されるので、それが、まともにその家庭の格差になる。

同世代集団の中で個別性を確立するというのは、家庭から同世代集団の中に出て行くことです。家を出て、やがては世の中に出て行くこととの第一歩を踏み出すわけです。家を離れて同世代の中で思いっきり自分を発揮する。時には家族の言うことよりも友達の言うことの方が大事になってくる。小学校に行くと、そういう集団が確立して、初めて子どもは家庭を離れる、家庭から巣立つことができるのです。

コロナ禍では子どもたちが家庭に拘束されて、家庭から動けなくなる。学校には行くのだけれども、そこで深く付き合ったり、交わったり、やり取りしたりということが大きく制限されていくことで、子どもたちの先へ進む社会性も制限される。社会に出て行くことができない

と、ずっと家の中で足踏みしているしかないのです。

この2年間は、授業内容の制約、登校することの制限があった。大学は、ほとんどオンライン授業です。もう年度がほとんど終わろうとしているけど、去年の春に入学したものの一回も大学には行っていない。だから友達とも一回も会っていないという大学生がたくさんいます。大学生だからオンラインかもしれないけれども、どうやって社会に出て行くことを選ぶのだろうか、人の間で上手にやっていくことを学べるのだろうか。大きな環境の変化で、子ども達はずごく閉塞感を持っている。家庭も閉塞しているということだろうと思います。

■フラストレーションが充満した状況

ウィルスがこれだけ流行って経済がガタガタになっていくのを目の当たりにする。経済がこれからどう回っていくのか、もうコロナ次第こんな事はかつてなかった。そういう中、大人達にとっては、すごくフラストレーションが充満するでしょうし、経済は大きな痛手です。グローバル社会は資本主義社会そのもので、経済が発展することが幸福なのだというところに議論の始めを置くわけです。「経済成長」人間

の幸福」というふうに考えている限り、幸福になりつこないです。儲かるってこと以外の幸せのカタチを、提示できないフラストレーションがあります。仕事によっては、転職をしなきゃいけないことになる。やっつけていけない保育園がいっぱい出てきたりする。すると、保育園に子どもを預けている大人の仕事が回らない。大人の社会がコロナに翻弄されている。そういう社会を子どもはどう見ているのだろうか？

子どもは、割とシニカルです。それまで鬼滅の刃の話とか、ゲームの話しか乗ってこなかった子ども達に、ふと「コロナどうなると思う？」って聞くと意外にシニカルで現実的なことが返ってきます。「だって、先生、今の状況を見たらってそんな簡単に解決するはずないじゃない。あと1年は続くよ」みたいなことを子どもは言います。大人の混乱を子どもはよく知っていると思います。

4、子どもの育ちの支えと心の問題

今のような状況と子どもの心の問題は、すごく深い関係にあります。

子どもたちの心が順調に育つ青信号があります。その青信号が上手に点っていくためには、

4つの要素があると私は常々考えています。

■子どもの発達のパワー

これは直接コロナと関係なしに僕はいつも考えていることなのです。子どもの心が上手に育つために一番必要なのは、子どもの「発達の潜在力」です。子どもの心ってすごく高いポテンシャルを持っていて、子どもの発達の潜在力にビックリさせられます。以前、あんなに周りを困らせ自分も困っていた子どもが、1、2カ月すると問題はなくなっていて、全然違う表情を見せてくれることがある。それってなんの要素かと言うと、お薬が効いたとか親が工夫したとかじゃなく、心のアンバランスを子どもの育ちが追い越していくのです。すると問題が解消していくことがあります。それをどう發揮でききるかが育ちの鍵で、言ってみればロケットの推進力みたいなものです。

■家庭養育の心理的安定

ロケットって何本かのブースターを束ねて一本のロケットにするのですが、バランスよく推進力が揃っていればまっすぐ飛んで行く。推進力の高いロケットを持っていっても、発射台がしっかりしないと飛んでいけないのです。発射台は何かと言うと、家庭です。基礎をしっかりと

置いた上にやぐらを立てて、必要なものを全部組み上げて、全部のものを注入し、時には人も乗り込んでカウントダウンして、「それ行け」っていう、これが発射台です。だから、家庭がどれだけ安定し、いろんなものを供給してくれるのかということが、子どもの育ちがどうスタートするのかに關係している。

■子ども集団の自尊心（自己受容性）

ロケットがどこに向かって飛んでいくかで。それが人工衛星なのか、惑星探査機なのか、火星ロケットなのかで違う。準備が全部違うし、機能も違う。それに相当するのが、「子どもも集団の自尊心」。子どもたちが群れて遊んでいて、加えてもらいたい、あの遊びがやりたい、やっていることを僕も知りたいと思うことで、ポテンシャルを一番フルに發揮するのです。その子どもたちの集団が輝いていることがすごく大事。これが揃うと、子どもたちはロケットに火をつけてまっしぐらに成長していく。

■安定した養育環境

さらにそれを支えるものが、コミュニティです。応援団としての大人たちがいて、初めて、子どもたち集団が自尊心をもつ。自分たちが何かできるようになる、大きくなっていくのはい

いことだと思えるようになる。それを支える大人たちが必要です。

これは言わば、学校の先生とか地域とかに相当するのです。地域の人たちが子ども集団を子どもとして見てくれる。子どもの育ちが大事だと考えてくれるから、子どもたちの集団が大きくなっていく。同時にそのコミュニティは家庭にも大きく影響しています。

例えばお母さん一人では絶対子どもを育てられない。人間の子育てというのは、それを預ける人がいること。実家のお母さんかもしれないし、近所のママ友かもしれないし、保育園かもしれない。いずれにせよ、誰かに預けることができて初めて子どもが育っていくし、家庭が安定していく。そういうやりとりがこのコミュニティと家庭の間にはあります。これが支えになって、初めてこの全体が成り立つのです。

■家庭養育の心理的不安定

ここに先ほどのコロナのネガティブな要素がかかってくる。例えば、一緒にいる機会が少ないというのは、子どもたちが大きくなっていく、みんなの中に入っていくと思うプロセスを邪魔します。コミュニティが、学校の教育や子どもの育ちに関与できないということ

は、子どもたちが自尊心を持つことを難しくしてしまうのです。同じように、コミュニティは家庭を支えることもできないから養育環境が閉塞していくし、そういう中で家庭がお互いに良い条件を作ることが難しくなる。

そうすると、この青信号だったものが赤信号になって全部不安定になるのです。

いい循環をつくっていた要素が、一転してアンバランスになることで、悪循環の要素になってしまう。

■子どもの発達の不均衡

この悪循環が直接は目に見えませんが、目に見える形があります。例えば、子どもの発達の不均衡。多少アンバランスがある子どもたちも、推進力で成長していくことで、アンバランスを乗り越えてバランスの良い子どもになり成長していくのです。

推進力が発揮させてもらえないような発射台の不備があると、子どもの発達が不均衡のまま残ってしまう。そうすると、発達障害が増加したように見える。本来の発達障害というのはその子どものポテンシャルがアンバランスなのでうまく伸びられない。

同じような現象が、家庭が不安定でも起こる

ことがあります。性能のいいロケットだけでも発射台がしっかりしないから飛んで行けない事がある。あるいはがんばって力を発揮したいのだけれども、その力を発揮させてくれるような仲間がいない。仲間に受け入れてもらえないときにアンバランスが起こる。すると結果的にはアンバランスな子どもが増えていくことになります。

あるいは、そのアンバランスな子どもが、仲間集団に入っていくと思うときに、壁があります。すぐ高いハードルがあるということになります。アンバランスが取れないままの子どもは、みんなの中に入っていくけないのです。集団不適應とか不登校になっていくのですけども、その子どもにとって「みんな」っていうのが、自分がついていけないような集団に思えないのです。ついで行きたいと思えるような集団に思えないときにこういった問題が起きてくる。

■子ども集団の自尊感の低下

バランスが少し悪い子どもが自分の仲間集団の中に入っていくとする時に、子どもたちが自尊心を持ってないと、自分たちがもつと崩れる。その子どもたちを仲間に入れないという動きになる。そうすると、もつとバランスの悪い

子どもにとっては入りにくい集団になってきます。それを積極的にやるといいです。いじめは、自分たちはあいつみたいにウザくないから大丈夫だねって、ターゲットになる子どもを排斥する行動です。子どもたちの自尊心が低下している。自分たちがOKだっていう感じが持てないから、もつとダメなやつを見つけてラベリングすることで自分たちはOKだと思いたがる。そうするといじめが起き、子どもたちに傷つきが起こる。いじめられた子はすごく傷つくし、いじめられている子も実は傷ついていて、いつ自分がいじめられる側になるかわからないという状況。それが長く続けば子どものPTSDが起きる。場合によっては子どもが自殺するみたいな事が起こる。

子どもは、すぐ自尊心が傷つくから自殺してしまうのです。いじめが自殺の一番大きな原因かと言うと違うのです。子どもの自殺統計では、実はいじめがトップじゃない。成績です。家庭で指導される、学校で指導される、成績が上がないことを苦にして自殺する。子どもたちがいい成績を取らないと大人にならせてもらえないという状況。つまり、子どもたちを本当は支えて、「大丈夫だよ」って言ってあげるはずの大人たちが「良い成績取らないと大人に

なれないよ」って言っていることです。それは子どもたちにとってすごく矛盾している。

■青年期の社会的逸脱は子どもの抗議

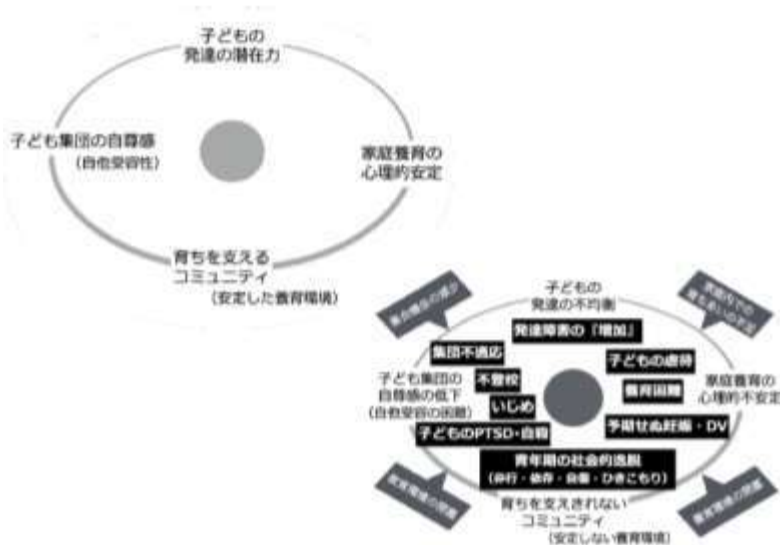
青年期の社会的逸脱は、子どもたちの傷つきの表れだと言ってもいい。依存とか自傷、引きこもりなど、社会にうまく出ていけない、出ていく形が見つからない子どもたちの成長過程のつまりずきの問題があります。

それでも年齢がくると社会に放り出されてしまう。二十歳過ぎたのに仕事してないのは「どういう理由なの？」と言われる。引きこもりもさせてもらわず、形だけ社会に出る。でも寄る辺なくて寂しくてしょうがないからDVとか望まない妊娠とかに簡単につながります。しょうがないからと家庭を作る。でも子どもを育てられないです。大人になるまでの準備ってしていないわけですから。養育困難とか、ネグレクトとか虐待という問題が起こる。虐待は家庭という安定した基盤が崩れているということですから。虐待とまでいかななくても子どもを育てるのに息詰まる家庭というのはいっぱいあります。

■「子どもの育ちの支えと心の問題」

周りの目には見えない心の様子は、子どもたち側から出すサインなのです。私も40年近く

○ 子どもの育ちの支えと心の問題



児童精神科やっているのですけれども、なんで児童精神科がやることは減らないのだろうという事です。発達障害が増えている。いじめも不登校も増えている。自殺も増えているし自傷行為、依存の問題も増えている。DVも増えているし言うまでもなく虐待も増えている。

この「子どもの育ちの支えと心の問題」の図

が出来上がった瞬間に「ああなるほどね」と思いました。減らないはずです。悪循環があり問題は根っこで繋がっているのです。その問題には実は誰も手をつけてないのです。しかもその根っこのあるところにある問題を今回のコロナの状況が、グンと後押ししたのです。こういう状況の中にいる子どもたちにとっては育ちがなかなか保証してもらえない。そういう厳しいところに私たちはいる。この中で子どもの育ちをどうやって保証しようかということを考えていただければと思います。

5、子どもたちのメンタルヘルス維持のための課題

私たちは何を課題にして子どもたちに接し、サポートしていったらいいか、3つのことを考えてみたいと思います。

2020年のコロナで大事なチャンスは何歳の時に失っていったか、その子にとっては長期的な影響の問題なのです。そういうなかでどうやったら希望を持ち、次の時代を構想できるか、その一つの提案としビーイングを良い状態にするということです。

① 環境被害の長期的影響を回避する

まず環境被害です。たいていの子どもは、パ

パーソナルなコミュニケーションを確立するのは、気心しれた、言わなくても分かる目配せとか、雰囲気で伝わるようなコミュニケーションをパーソナルなコミュニケーションといいます。でもそれだけでは世の中で生きていけない。自分のことを人に説明し、みんなに言われていることを自分のことだと理解する、ソーシャルコミュニケーションが必要です。

学校の環境が寸断されて、ほとんどバーチャルなものに置き換わっていき、ソーシャルコミュニケーションを学ぶ方法がすごく減っているわけです。時にはケンカしながらその能力をどうやって仲直りするかと仲裁するかとかいうことを繰り返しながら、子どもはソーシャルコミュニケーション(自分の言い分の伝え方、折り合いのつけ方)を学んでいくわけです。学力の保障だけではなく、ソーシャルコミュニケーションをこれから子どもたちにどうやって学ばせ、学んでいくかということを課題にする必要がある。

■居場所の多様化

今、学校と家庭にリスクが集中するという状況になっています。家庭は運命共同体です。学校も1回クラスターが起これば避けようがない。

ない。クラス丸ごと濃厚感染にならざるを得ない。集中することを避けるためには、ちゃんと子どもに居場所をあげる必要がある。居場所つていうのは子どもたちがここに居たいと願って安全に自分らしくそこに居られるところ。家にしろ、学校にしろ、「そこにいきなりダメです」と言われた瞬間に、居場所ではなくなるのです。もともと子どもたちは寄り道をしたり、どこかで群れたり遊びに行ったり自分で居場所を選ぶことで自分を確立していった。自分らしさを作っていることを意識した多様な居場所、今の時代でいえば安全な居場所を提供することも必要です。

■大人になることに希望が持てる

子どもたちが大人の世界を少しシニカルに見ています。大人に元気がない、大人が今の問題に立ち向かっている姿を見せてあげないと、子どもたちが大人になっていくモデルを描けないのです。大人になっていくっていいことだと思えることが必要です。

長期的に考える時、子どもたちが学ぶことや群れること、大人になっていくチャンスを奪わないこと、重大な悪影響がでないことなどを工夫する必要があります。

②新しい状況を生きる姿勢(希望的)

守ることばかりではなくて、少し攻めないとこの状況は乗り切れないので新しい意味を見つけたしたいと思います。

■歴史の当事者性

今から100年後の人たちが、2020年に生きていた人たちを見たときには、私たちは歴史上の人物です。しかもコロナは歴史に残る大事件です。この中でどういう振る舞いをしたかは歴史に残るのです。私たちは、その当事者です。新しい生き方なり、新しい問題の立て方なり、考え方という提示をすれば、後の人が「あの時代にこういうことを言った人がいた」となるわけです。歴史の転換点に私たちはいるという意識を持つと、ちよつと違ってくるませんか？

■不寛容に陥らない

不寛容は自己肯定感が下がった事によって他者を肯定できなくなったことですから、不安の表現と考えられます。あえて今そういう時代に寛容さが足りなくなっていることを意識して、どうやったら自分たちが寛容になれるかを考える。

■能動的・受容的に乗りきる

今のコロナの状況を全く能動的に乗り切れ

てない。こういう中で、どうやって能動的、受容的になれるかを、考えてみるといいのではないか。よくコロナに負けないとかって言うけど、「コロナに負けないって、一体どういうことなのか」を示すことになるし、「ああ、大人ってすごいな」と思ってもらえることになるのではないかと思うのです。

③ 子どものビーイングを良い状態に維持する

ヒントになるのは、ビーイングという考え方は、ビーイングとは、要するにドゥーイングの反対ですから、「いること」なんです。「すること」じゃなくて、「いること」。

■家庭機能を閉塞させない

元々家庭というのは、良いビーイングを子どもに与える、つまり子どもを存在させることです。子どもにとつて、いつも家庭は居てくれる人や場所があることです。

ビーイング（自尊心）というのは、健康な家庭が子どもに継承していくものです。実はコミュニケーションの良いビーイングを持つています。ということは、コミュニケーションの良いビーイングを子どもに伝えていくということにも繋がっています。ドゥーイング（能動性）には、正しいドゥーイング、間違ったドゥーイングがあ

るのです。けれども、ビーイングっていうのは、「その人がどういう風にいるか」とか「どんな人であるか」ということだから、間違ったビーイングはありえないのです。

私たちは、子どもたちに枠付をし、はみ出さないようにと指導する。これがドゥーイングを枠にはめることです。ビーイングは決して枠にはめることができない。子どもたちのビーイングを、いつも良く感じられるようにしてあげることが、すごく大事です。

■子どもが能動的に関われる方法提供

子どもたちへのコロナ情報がすごく限られている意味合いでは、子どもコロナ情報センタ―みたいなものを作るといいのではないか。つまり、コロナという問題に子どもたちがアクティブに関われるようにしてあげるのです。それで初めて子どもたちが自分で「コロナを乗り切った」と思えるようになるのではないか。

そのためには子どもたちを取り巻く大人たちのビーイングが、上手く子どもたちと向き合えていることと、コロナの問題に向き合えていることが必要だと思います。

ドゥーイングもビーイングも高い時は子どもたちも頑張っている。周りに働きかけて好奇

心丸出し、一番子どもらしいと思える。子ども自身も大人もこの状態の時の子どもを、一番子どもらしいと感じられる。ただ、子どもたちの心は常に動くのです。だから、ビーイングが下がる時もある。子どもたちがやってみたいと思うこと、好奇心を出すこととて、半分くらいは大人がしてほしくないことなので、それが見つかると子どもたちのビーイングが下がる。怒られた時は子どもたちがイライラしたり、反発したり、「だって」と何かに責任転嫁したり、言い訳したりする。その言い訳も通用しない。「何度言ったらわかるの」みたいな叱られ方で自分のビーイングが傷つくと、いじけちゃう、諦める、すねる、孤立する、ベそかく。その時の子どもは、ドゥーイングが下がってしまう。

■ドゥーイングの制限が

ビーイング低下につながるために

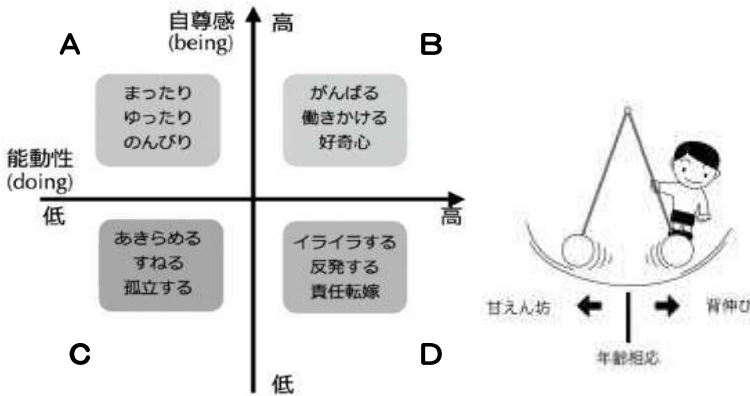
ビーイングが下がらない状態というのがあります。例えば、子どもたちが、まったり、ゆったりしてゲームか何かやってなかなか勉強しない。そういう時、大人はどうしますか。「そろそろ勉強したら？」って、プレッシャーをかける。ドゥーイングが高い方に、プレッシャーかけるけれど、その時の子どもは、『子どもた

ちの Well・Being とは何か…』の、図D(右下)に来るのです。それは子どものビーイングが傷つくから。子どもはよく言います。「お母さんに言われると、それまでやろうと思っていたことをやりたくななくなっちゃう。」子どもの言い訳じゃなくて、ビーイングが下がるのです。指図されるの、嫌ですから。どういう気持ちとか、その時のビーイングを無視して、行動だけ指図されると、ビーイングが下がる。その原理というのは、上から頭ごなしに叱りつけることから起こる訳です。

この図を読み解くと、大人も子どもも、図B(右上)に行くとい いけどなと思うんですけど、なかなかここに行けない訳です。

子どもの気持ちって振り子みたいなのがあるって、真ん中が年齢相応です。子どもの行動って、年齢相応でやっていることってあんまりなくて、半分は背伸びをしているか、半分は赤ちゃん返りをしている。能動的か受動的か、この間を常に揺れるのです。だから、それまでやれなかったことをや

○ 子どもたちの well-being とは何か…



ってみたいと思う。小さな子どもはそうですが、一人で歩いて行くんだみたいに頑張る。でも次の瞬間には「もう歩けない、おんぶ!」とやって言って、甘えん坊になる。その子どもの能力としてできる、できないじゃないのです。その時の気持ちの揺れです。これは常にあるってことを考えましょう。例えば、頑張っていた子どもがいるけれども、頑張りが効かなくなると、図D(右下)に来るのです。このイライラした状態でさっきの心の揺れをすると、この間を揺れる訳です。イライラしているか、拗ねているか、ビーイングが下がっている。自分はOKだって感覚が下がっている。もう少しこれを上げてあげられると、のんびりして充電をして、少し気持ちの良い赤ちゃん状態をやって、もうそろそろいいかなっ

て頃にちょっと頑張ってみようかなという気持ちになる。図のBに行かせようと思うためには、上手くこの状態を作ってあげる。つまり、図のCとDの間を揺れている状態から、少しビーイングを上げてあげるのです。ということに我々は気が付かないといけない。これがそのビーイングを大事にしてあげようっていうことです。このビーイングが良い状態を、僕らがイメージしてあげることが大事だと思います。

このコロナの状況の中で、子どもたちのビーイングが軒並み下がった。大人のビーイングも下がったんですけども、子どものビーイングがすごく下がった。維持できなくなった。そのことにちゃんと関心を持って大人が子どもに接しないと、のんびりしたり、ちょっと頑張ってみようと思ったり、能動性を発揮できるようにはならないのです。

僕らが引き続き考えたいのは、今の時代を経験した子どもたちが、これからどう育っていくのかということです。子どもたちが、新しい時代を創っていくなかで、酷い目に遭ったというだけではなく、ここを生き延びて、こんな知恵を持てたという、次の世代になってくれることを、僕は期待していきたいと思います。

● 講演会・おしゃべり会 アンケートより

＊子どもにとって家庭でも学校でもない安心して過ごせる居場所が必要だとわかりました。

＊大変納得感と気づきの多い講演をありがとうございました。ありがとうございます。私にはいま小学5年生の発達障害の息子がおります。1年生・3年生で教室に入らず、母子別室登校をしました。4年生のコロナ休校明けから学校に行けなくなり、数ヶ月の不登校のあと、母子別室登校の期間を経て、現在は復学しております。この度の講演内容で

あるコロナ不安とそれに向き合う視点について、政策・社会現象・育ちの環境の変化などの大きな視座だけでなく、子どもの心の育ちを構成する要素やそれらの好循環・悪循環、そしてBeing・Doingのお話が、息子の不安感や、復学するようになった過程などとリンクし過ぎて、もっと深くお話を聞きたいと思っています。

＊息子が自閉スペクトラム症の母です。まだ診断がつく前に、発達障害なのか環境がそうさせるのか、自分がうまく育てられず息子に特性がでたのかずっと気になっていました。お話を聞いて環境の大事さに気が付きました。子どもにとって安心な場所、作れるように自分自身がまわりに地域に頼れるよう少しずつ頑張ろうと思いました。

＊振り子のお話がとても興味深く、自分でも思い当たり、もっと詳しく伺いたいなと思いました。家庭の安心感を増すために、まず私が能動的になって、安心感を持つとうと思っています。

＊今、目の前で起こっている子どもたちの様子の背景がよく分かりました。イラストや動画で視覚的に理解出来たのも良かったです。また、理解を深めるため、再度講演会の動画を見て復習したいと思いました。beingは、一人で上げることが出来ない。コロナ禍だからこそ、大人が、かわり合うことの大切さを語り合い、かわり合う場や体験を作っていかなければと思います。

＊子どもたちへ環境が関係し生きづらさを増している現状で環境が生む発達障害。その子らしさを維持するdoingとbeingのバランスから生じる子どもたちが感じている生きづらさ、難しさなど、自分の中で確認できる部分や納得する部分などとても勉強になりました。

＊ビーイングの大切さが、おしゃべり会のやり取りの中で、より具体的に分かりました。自身のビーイングを高めると、家族のビーイングも懐深く認められると思います。

＊聴いただけでは薄れていくかもしれない感想を、語ることで確かめることができたと思います。

ます。短い時間でも、おしゃべり出来てよかったです。

＊肌で感じる感動のようなものは、リアル参加に比べて少ないと思いますが、アーカイブ視聴だと、メモを取り切れなくても何度も戻って視聴でき、時間の制約が無いのも、助かりました。

● 田中哲さん講演会を終えて

実行委員長 檜和田美樹（中部）

田中哲さんとは初めての出会いでしたが、昨年の苦野一徳さん講演会でオンライン講演会も後日のYouTube 配信も経験済みでした。遠方からの参加や後日視聴が可能になり、オンラインでの可能性を感じています。コロナ禍の下で子どもたちというテーマのように、大人たちは「オンラインでの会議や講演会」というスキルを身に着けて、学びを止めずに活動しています。

内容は、コロナ禍で子どもたちの困難、そして成長するにつれての心の揺れ「doing とbeing」をやさしい言葉でお話いただきました。おしゃべり会でも丁寧にお話しされ、理解が深まりました。「愛着障害」についてもさらに田中さんから聴きたい！という声も出て、来年の講師としてお願いしたいと思っています。